

令和 6 年 6 月 24 日現在

機関番号：35507

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K02554

研究課題名（和文）フレーベルにみる就学前教育と初等教育を接続する言語教授構想

研究課題名（英文）The concept of language instruction connecting pre-school and primary education in Froebel

研究代表者

松村 納央子（Matsumura, Naoko）

山口学芸大学・教育学部・教授

研究者番号：50341136

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,000,000円

研究成果の概要（和文）：フレーベルの言語教授において、教育者と子どもとの対話が要である。読み書きを教授する段階においては、読みの教授より書きの教授が先行すること、書くという活動は線描であり、線描は事物の予感・直感が進むに従って同時になされるという前提に立っている。線描と文字を書く活動は、棒並べ遊びにより形を作る活動を経て子どもの手で文字を書く活動へと至る。また、フレーベルにおいて子どもが言語を学ぶ活動は家族に代表される親しい大人からの呼びかけによって触発される。「書く」・「読む」教授においては手紙の中で自分の名を呼びかけられていることを契機としている。またその手紙を手本として子どもは更なる言語教授へと導かれる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

20世紀後半以降に編集された資料及び未刊行資料を基に、乳幼児期から学校期の教育までを射程に入れていたフレーベルの言語教授の展開においては、就学前教育と学校教育とが断絶するものではないことが確認された。またこの2領域の教育が架橋するにあたり繰り返し練習する頻度の高い「書く」「読む」の教授において、子どもに宛てた手紙を教材として採用することにより一人ひとりに応じた学びの基底となること、その子どもの生活世界を広げる契機となることは、現在「個別最適な学び」にも通ずる点がある。

研究成果の概要（英文）：The dialogue between the educator and the child is a key element in Froebel's language instruction. It assumes that at the stage of instruction in reading and writing, the instruction in writing precedes the instruction in reading, that the activity of writing is line-drawing, and that line-drawing is carried out simultaneously with the development of premonitions and intuitions about things. The activities of line-drawing and letter-writing lead to the activity of letter-writing with the child's hands through the activity of making shapes by playing with sticks. In Froebel, the child's language learning activities are inspired by the call of close adults, such as family members. In the instruction of writing and reading, this is triggered by the child being addressed by his or her own name in a letter. The letter also serves as a model for further language instruction of writing.

研究分野：教育思想史

キーワード：フレーベル 教授 言語 対話 手紙

1. 研究開始当初の背景

フレーベル (Friedrich Wilhelm August Fröbel 1782-1852) の教授論について着目した背景には、近年ドイツにおいて教育方法やカリキュラムの検討という文脈から就学前教育と学校教育との接続が課題であること、そのことが教育思想史研究においてもトピックとなったことが挙げられる。2001年 PISA ショック以降、就学前教育 (養育と保護の段階) においても子どもが認知的・情緒的・社会的・精神活動的諸局面で重要となる能力や技能を獲得するプロセスとしての教育の構造化が企図されるようになった。この動向と並行して、Bildung (「陶冶」ないしは「人間形成」、主として学習者側の変容に焦点化) や Erziehung (「教育」、主として教育者の営為に焦点化) の様態も捉え直しが進んできた。こうした状況の下、就学前教育から初等教育への架橋を学びの過程 (学習者の内的変化のプロセス) と教育者との関わりとの原理的考察の対象としてフレーベルの教授論が検討された。

ノイマンはフレーベルの就学前教育構想の特色が子どもと養育者との間に生じる対話を手がかりとした結びつきにあることを指摘した (Neumann, K. 2015: *Lebenskompetenz entwickeln im Dialog. Zur Aktualität der Pädagogik Friedrich Fröbels*. In: *Diskurs Kindheits- und Jugendforschung*. Jg.10, H. 4, S.381-398)。ただし、ノイマンはフレーベルの 1842 年、保育機関ならびに女性教育機関を運営していたブルンスビーク宛書簡の記述から、遊戯による養育 (Spielpflege) は子どもの自由な活動が優位であって、学校の教授 (Unterricht) には差異があることを指摘している。確かに 1840 年代以降のフレーベルの論述には自身の教育構想の新しさを強調する意図を持って遊戯を用いていたことは否めないが、教授そのものを否定する立場にはない。ノイマンが依拠した書簡の該当箇所には子どもの遊戯であっても教育 (belehren) や教授も展開することも触れている。これまでの研究資料の再検討も含め、言語そのものを習得する教育活動ならびに言語を媒介とする (還元すれば教育者と児童生徒との対話を前提とする) 教育活動の教授論的性格ならびにその構成を描出することに関しては、フレーベル研究上十分な検討がなされていないという見解に至った。

2. 研究の目的

本研究は幼稚園から初等学校を経て上級学校へという学校教育構想を含む「人間の発達」を企図、実践に携わった教育者のひとりとしてフレーベルを位置付け、彼の言語教授論における学習者の内的変化のプロセス並びに教育者の関与に寄与する原理として言語教授に関わる論理的枠組みを解明することを目的とした。この解明への取り組みは、コンピテンシー開発の視座、あるいは子どもの自己の内的形成の視座どちらにおいても重視される教育者の振る舞いに示唆を得ることとともに、「真正な」フレーベルの「言語」教授構想の解明を課題とするものである。フレーベルの教授論は総じて「真正な」解明が進んでいない。その背景には資料・解釈上の問題が挙げられる。日本のフレーベル研究で中心資料とされてきたのはハンブルクの民衆学校や幼稚園教育運動の中心人物であった W.ランゲによる編集版『フリードリヒ・フレーベル教育学著作集』(Lange, W. (Hrsg.): *Friedrich Fröbel's gesammelte pädagogische Schriften*. 1862/1863、小原國芳・荘司雅子監修『フレーベル全集』全 5 巻、玉川大学出版部、1977-1981) である。この編集版自体は、フレーベルの主要な出版物を収めたものとして学校教育領域ならびに就学前教育の領域それぞれの研究に資するものである。ただし、ランゲをはじめとする 19 世紀後半の編集版は総じて原典批判はない。また、それぞれの教育運動に資することを目的として編集されたため、省略や改編も散見される。19 世紀後半の編集版を主要資料とする限り、フレーベル自身の当初の意図は時として見失うことになりかねない。加えて、フレーベルの思想は刊行物もさることながら関係者への書簡を通じて深化してきたことがハイラントにより指摘されている (Vgl. Heiland, H. 2017: *Neue Beiträge zur Fröbelforschung*. Würzburg)。手稿を活用した思想解明はおも残された課題のひとつである。

3. 研究の方法

上述の研究目的に即して、本研究では 20 世紀以降の原典批判がなされた編集版、ドイツベルリン陶治史図書館所蔵遺稿 (DIPF/ BBF/ Archiv: Nachlass Friedrich Fröbel) ならびにテューリンゲン州ハイデックスブルク・ルードールシュタット博物館所属フリードリヒ・フレーベル博物館所蔵遺稿 (Nachlass im Blankenburger Fröbelmuseum: BIM) を閲覧、関係資料を収集し、以下 2 点について理論と実践の往還を含みこんだフレーベルの言語教授の構想を抽出した。

- (1) フレーベルの学校教育における言語教授の特質について、特にペスタロッチの学園時代 (1809 年) 並びにカイルハウ教育舎時代のフレーベルの論考に着目して明らかにした。その際、ペスタロッチ的な言語教授から何を出発点とし、何を批判したかについて描出した。

- (2) フレーベルの遊戯教育学における言語教授の特質について、1850年の著作「リナはどのように読み書きを学ぶか」を中心に明らかにした。また、フレーベルの教育実践に着目し、子ども宛の書簡や子どもからの書簡（未刊行資料を含む）を基に、言語教授の実践について、その特色を明らかにした。

4. 研究成果

(1) フレーベルの教育構想の出発点はペスタロッチの基礎陶冶論にある。フレーベルの言語教授の端緒は、ペスタロッチとその協力者による『母の書』（1805）に対する批判的検討である。1809年4月のシュヴァルトブルク・ルードールシュタット侯妃カロリーネ・ルイーゼ宛書簡において展開された当時のフレーベルの『母の書』解釈に従えば、母親と子ども間において言語は「伝達の媒介（das Medium der Mitteilung）」として子どもに気づきを（そのための観察を）促す。そして発話による個々の単語の意味と、いくつかの単語を組み合わせ、眼前にあるものを時には身体動作を伴いながら発話していくことで自然物の描写、生活世界の中にある工芸品の描写、地理学、数・形量や唱歌、図画に至る教授領域に通じる。その教授の前段階である家庭での教育において、母と子の間には「音による言葉（Tonsprache）」がある。すなわち発話は対面による伝達方法であり、伝えたい相手が眼前にいない、あるいはその他の要因によって音声による伝達や表現が困難である時に記号である文字が必要となる。読み書き教授は「音による言葉」を模写すること、音声を人々によって取り決められた記号として模写したものである文字を扱う教授であるとフレーベルは記した。文字は「必ずしも人間の本性によって条件づけられていない」がゆえに、読み書きの習得には「機械的な能力」、「記憶力」を要するため、フレーベルは他の教授とは区別していた。また、ペスタロッチの教授法においても試行錯誤が繰り返されている領域として捉えており、フレーベル自身は読み書き教授も他の領域との有機的な配列を求めようとしていた。1809年4月侯妃宛書簡執筆以降、フレーベルはペスタロッチの教授法について再度整理しようとした草稿が残されている。それらの草稿によると、フレーベルは「気づき」が始まる時期を生後1年から2年と想定し、その次の段階として2歳から4歳において言語能力が発達すること、4歳から7歳にかけて言語能力が深化し、直観と並列して言語による表現が高まっていくことを意識している。フレーベルが課題とした事柄のひとつには、子どもの発達を前提に、フレーベル自身がこの教授構成において書くことや読むことをいずれの教授領域・対象と対比・関連するのかがである。フレーベルにおいては、眼前の対象に気づき、それを内面化しさらに表出する段階において、言語の表出（発話）と線画を並置した。この言語表出の段階では、聴覚で感知し、発話することである。その次段階に書くことと読むことが位置するが、書くことは線画と、読むことは形態学とに関連づけられうることを、草稿では意識していることがうかがえる。また、フレーベルにおいて言語は数学や哲学と同様の必要条件を備えた「学問（Wissenschaft）」である、という見解が残されている。この文脈での「学問」とは、哲学や数学同様の原理、条件を備えている教授対象である。母と子の対話において、母が対象物を名詞で呼ぶことを契機に、子どもは事物の名詞とともに事物の特性に気づく、認識陶冶の出発点としての発話が想定されている。

ここでフレーベルが課題としたのは、言語教授が機械的なものに陥ることをどのように回避するかであった。フレーベルの著作『人間の教育』（1826）では、言語の教授構成を精緻に示そうとしたことがうかがえる。カイルハウの実践を通じて、フレーベルは言語が人間の「内なる世界、つまり心情と精神の世界」と人間の周囲に存在する「この外の世界、つまり形態と物体の世界」とを結びつける、媒介の性質を有するものと位置づけた。「言語は、もともとはこの両者とひとつのものとして現れてくるが、次第に独立のものとして両者から分離し、しかも分離することによって、両方の世界を結合するものとして、現れてくる」。このような性質を有する言語の教授の端緒として、フレーベルはまず話すこと（sprechen/ s-prechen）に大きな意義を与えている。彼によれば、話すこととは、「自分自身をひきさく（sich selbst brechen）」ことを内包する語である。「自分自身をひきさく」とは、発話によって人間の内的な世界を表出すると同時に、発話によって人間の周囲にある自然をも模写するものでもある。『人間の教育』において展開された言語教授では、読み書き教授の前段階として言葉を聴き、発音する教授「発音の練習（Sprechübung）」が設定された。耳にした言葉を発話することで、「言語の運動の法則」すなわち音韻を認識し、言語が内的・外的それぞれの表現であることを意識するようになる。そして語ひとつひとつは教育者が子どもに語りかけることによって進行する。これは言葉の「語の大きさの相違」、すなわちその語の綴りは「音節の数の多少」に関連していることをまず認識し、次に「それぞれの音節の部分の異種性」の認識へと進む。音節の異種性への着目は、母音がまずあること、そして子音によって構成されること、発音と綴りとの関連があることを意識づけるものである。この発話を踏まえて後、フレーベルは書くことを教授する段階へと移行する。書く教授において生徒はラテン大文字の書体で書く。まず母音 i を発音しながら、方眼がひかれた石板に大文字 I を書くことから始める。続いて教師の質問に答えつつ、鼻音子音 n を石板に書く練習をする。次に m を書く練習をする。続いて複母音 ei を発音しながらラテン大文字で石板に書く。この段階で、ein, nein, mein という単語を発話しつつ大文字で書く。それから母音 u の大文字を発話しつつ書く練習をし、un, nu, nun, um へ移る。その後母音 o、母音 a、複母音 ie を発話しながら

書く練習をし、加えて子音 r, v, w, l, b, t, k を書く練習をする。この教授活動で取り上げる言葉は生徒の「自分の生活の範囲内や自分の意識の段階内にあるあらゆる表象や思想」を指し示すものである。故に、単にラテン大文字のアルファベットを書く練習ではない。言語がどのように構成されているか、音価・音節、綴りの規則性を見だし、表現する活動として教師と生徒の問答を含んだ教授過程をたどる。この書く教授で前提となっているのは線画であり、それゆえ読みの教授よりも先行する。ただし、ここでの教授方法は単に教師の発問と生徒の回答という形式を提示していたに過ぎない。

また、フレーベルは「ヘルバ・プラン」(1828-1829)において民衆教育舎で展開される教授対象の構想を残している。「ヘルバ・プラン」の中核と想定された民衆教育舎は6~7歳から14歳までを対象とするもので、言語に関連する教授項目の細分化が図られた。『人間の教育』でも論述された対象から受けた印象をいかに表すかに着目する「言葉の練習 (Sprachübung)」、「読み (Lesen) (基礎づけクラスから練習クラス、応用クラスまで)のほかに、「習字 (Schönschreiben) (練習クラス、応用クラス) 生活圏に見い出される事物を分類すること、その事物に結びつく動詞や関連する単語を考察することによって事物の内的連関を把握することが目された「言語領域の直観 (Anschauung des Sprachgebiets) (練習クラス) 文法を中心に学ぶ「言語法則と言語形式の学 (Sprachgesetze und Sprachformenlehre) (練習クラス、応用クラス) 「言語表現 (Sprachdarstellung) (練習クラス、応用クラス) 「正書法 (Rechtschreiben) (基礎づけクラス、練習クラス) が挙げられていた。また、「筆記、素描、ピアノ等のための手腕の練習 (Übungen der Arme und Finger für Schreiben, Zeichnen, Klavier ec.) (基礎づけクラス) も挙げられ、書くための教授への準備領域も整備しようとしたことがうかがえる。ただ、1820年代のフレーベルの著作からは、より具体的な教授の進行については説明されていない。

(2) 『人間の教育』の段階で既に教師と生徒の対話(問答)を著述したフレーベルは、後年の教育玩具の手引書(第一教育玩具 1838; 第二教育玩具 1838; 第三教育玩具 1844/ 1851)や『母の歌と愛撫の歌』(1844)等、遊びを中心とした教育の展開に伴い、物語あるいは対話を媒介とする活動を書き記した。これらの著作において、子どもとの遊びに際し大人が何をどのように語りかけるか、その事例を示した点が特色である。この対話については、遊びばかりでなく読み書き教授においてもフレーベルは具体的な場面と登場人物とを設定した上で叙述した点がそれ以前の教授論と異なる点である。

対話を媒介とする言語の教授活動の一端をうかがわせる文書として、書簡が挙げられる。フレーベルが代父となった子どもマリー・ミュラー (Müller, Marie 1841-1900) にあて 1847 年に書き送った書簡は、棒並べの遊具を贈った際に添えたもので、幼稚園に通うマリーに棒並べの遊具を贈るにあたって、棒を使って自分で文字並べができること、図形や数を数えることもできることを書き送っている。その内容は様々な遊戯へと誘っているのであるが、同時にその字体に注目すると、最初の1ページはラテン大文字、次ページでは比較的平易な筆記体、その次のページは印刷活字に近い筆記体、そして最終ページはフレーベルが成人に書き送る用いる筆記体と、4種の書体で綴られている。マリー宛の書簡を4つの書体で綴った意図そのものは明らかではない。しかし、カイルハウ教育舎や「ヘルバ・プラン」の教授対象として挙げられた「正書法」や「習字」の導入として試みられた可能性もあるだろう。また、代父として言葉を贈るという行為自体が、カイルハウ教育舎時代に提示していた「教育的家庭」の再設定とも捉えうる。同年マリーからフレーベルにあてた書簡では、棒並べでいろいろ形作ったこと、そして読み書きの時間がありもう少しすれば自分一人でフレーベルに手紙が書けるだろう、と報告されている。それから5年後、1851年7月16日付のマリーからフレーベルに宛てた書簡では、薄く鉛筆で行線が引かれ、それに沿うように筆記体が記されている。その書簡には、フレーベルが本や詩を贈ってくれたことに対する感謝と、フレーベルの結婚式の様子をリーベンシュタインに住むおじ(フレーベルの甥ハインリヒ・ミュラー)から話してもらったことを伝えている。

こうした子どもとの交流を踏まえ、就学前教育から初等教育への接続モデルとしてフレーベルの「リナはどのように読み書きを学ぶか」(1850)を発表した。この著作に登場する6歳の女児リナは幼稚園から初等学校へ入学する一段階前の「媒介学校」段階にあり、「父に手紙を書きたい」という願いから、その母、おじ達との対話を通して、書くこと・読むことを学んでいく。学びの過程として、まず幼稚園で遊んだ棒片からラテン大文字を形づくる。その際音と文字とを結びつけつつ活動する。そして石盤を用いて文字を書く練習へと進み、父への手紙に何を書こうか考え、物語中盤ではラテン大文字で父に手紙を綴るに至る。また、リナは幼稚園の年下の子ども達からどのように読み書きを学んだか実際にやってみせるよう求められ、それに応答する場面があり、子ども達の中で遊び、学ぶ際にも対話が展開されている。

就学前教育と初等教育との接続において、フレーベルの対話、教育玩具ならびに教材により構成される言語教授は、子どもにとっては遊びの延長線上での活動であっても、その子どもに応答する大人の関わりはフレーベルの学校教育学的な言語教授を基盤とするものである。その点では、就学前教育において子どもに関わる者と初等教育において子どもに関わる者両者が何に携わっており、何を目指しているか共有した上でそれぞれの実践に生かす試みである。就学前・初等教育いずれにおいても対話を媒介とする教育方法を採用することによりその連続性を提示しようとしたことが確認できる。

フレーベルはその遊戯教育学に関する著述において大人と子どもの対話を提示した。『母の歌

と愛撫の歌』以降、子どもと大人との個人的な関わりが読み書きの教授を左右する大きな要素として描出されている。『母の歌と愛撫の歌』は乳幼児期の子どもにどのような言語的環境が望ましいかを提示したものであり、より生活に密着した題材を採用した、子どもに語り聞かせるための文章によって構成された。『母の歌と愛撫の歌』を媒介に子どもと大人との間で時間を共有し、遊びを共有すること、子どもの心身の発達を促すことが両立しうる点において、フレーベルはペスタロッチ『母の書』の難点であった機械的な教授を回避する教育的活動を提示した。加えて手稿を参照すると、単に形象としての文字を覚え組み合わせるといった言語教授に留まらず、子ども自身が「語りかけられた」ことを思い出し、「手紙を送ってくれた」ことに対する喜び、「文字を通して伝えたい」意欲、そして「文字によって自分の内面を表す」という一連の教育的営為が想定されていることが明らかとなった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 松村納央子	4. 巻 36
2. 論文標題 Fr. フレーベルにおける読み書き教授の諸相	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 人間教育の探究	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松村納央子	4. 巻 35
2. 論文標題 シンポジウム 幼保小の円滑な接続と連携を目指して 趣旨説明	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 人間教育の探究	6. 最初と最後の頁 99-102
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松村納央子	4. 巻 124
2. 論文標題 書評 小笠原道雄著『原典資料の解読によるフリードリヒ・フレーベルの研究 - 国際化の視点からみるフ レーベルの思想・制度・実践に関する考察』	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 教育哲学研究	6. 最初と最後の頁 248-253
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松村納央子	4. 巻 12
2. 論文標題 Fr. フレーベルの言語観に関する考察：遊戯教育学と学校教育学との接続を踏まえて	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 山口学芸研究	6. 最初と最後の頁 33-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 松村納央子
2. 発表標題 Fr. フレーベル「読み」・「書き」教授の諸相
3. 学会等名 日本ペスタロッチー・フレーベル学会第40回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 松村 納央子
2. 発表標題 シンポジウム 幼保小の円滑な接続と連携を目指して 趣旨説明
3. 学会等名 日本ペスタロッチー・フレーベル学会第39回大会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 Bruce, T., Nishida, Y., Powell, S., Wasmuth, H., Whinnett, J. (Ed.)	4. 発行年 2023年
2. 出版社 Bloomsbury Publishing	5. 総ページ数 504
3. 書名 The Bloomsbury Handbook to Friedrich Froebel	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------